

妖婆

芥川龍之介

青空文庫

あなたは私の申し上げる事を御信じにならないかも知れません。いや、きつと嘘だと御思いなさるでしょう。昔なら知らず、これから私の申し上げる事は、大正の昭代にあつた事なのです。しかも御同様住み慣れている、この東京にあつた事なのです。外へ出れば電車や自働車が走っている。内へはいればしつきりなく電話のベルが鳴っている。新聞を見れば同盟罷工どうめいひこうや婦人運動の報道が出ている。——そう云う今日、この大都会の一隅でポオやホフマンの小説にでもありそうな、気味の悪い事件が起つたと云う事は、いくら私が事実だと申した所で、御信じになれないのは御ごもつ尤もです。が、その東京の町々の燈火が、幾百万あるにしても、

日没と共に蔽いかかる夜をことごとく焼き払って、昼に返す訣わけには行きますまい。ちようどそれと同じように、無線電信や飛行機がいかに自然を征服したと云つても、その自然の奥に潜んでいる神秘的な世界の地獄までも、引く事が出来たと云う次第ではありません。それならどうして、この文明の日光に照らされた東京にも平常は夢の中のみ跳ちようりよう梁あなぐらする精霊たちの秘密な力が、時と場合とでアウエルバッハの窖あなぐらのような不思議を現じないと云えましょう。時と場合どころではありません。私に云わせれば、あなたの御注意次第で、驚くべき超自然的な現象は、まるで夜咲く花のように、始終我々の周囲にも出没去来しているのです。

たとえば冬の夜更などに、銀座通りを御歩きになつて見ると、

必ずアスファルトの上に落ちてゐる紙屑が、数にしておよそ二十ばかり、一つ所に集まつて、くるくる風に渦を巻いてゐるのが、御眼に止まる事でしょう。それだけなら、何も申し上げるほどの事はありませんが、ためしにその紙屑が渦を巻いてゐる所を、勘かんじよう

定じやうして御覧なさい。必ず新橋から京橋までの間に、左側に三個所、右側に一個所あつて、しかもそれが一つ残らず、四つ辻に近い所ですから、これもあるいは気流の関係だとしても、申して申せない事はありますまい。けれどももう少し注意して御覧になると、どの紙屑の渦の中にも、きつと赤い紙屑が一つある——活動写真の広告だとか、千代紙の切れ端だとか、乃至ないはまたまつちの商標だとか、物はいろいろ変かわつていても、赤い色が見えるのは、いつ

でも変りがありません。それがまるでほかの紙屑ひきいを率ひきいるように、一しきり風が動いたと思うと、まっさきにひらりと舞上ります。と、かすかな砂煙の中から囁くような声が起つて、そここに白く散らかつていた紙屑が、たちまちアスファルトの空へ消えてしまふ。消えてしまふのじゃありません。一度にさつと輪を描いて、流れるように飛ぶのです。風が落ちる時もその通り、今まで私が見た所では、赤い紙が先へ止まりました。こうなるといかにあなたでも、御不審が起らずにはいられますまい。私は勿論不審です。現に二三度は往来へ立ち止まつて、近くの シヨウウインドウ 飾 窓 から、大幅の光がさす中に、しつきりなく飛びまわる紙屑を、じつと透かして見た事もありました。実際その時はそうして見たら、ふだん

は人間の眼に見えない物も、夕暗にまぎれる蝙蝠こうもりほどは、臃げにしろ、彷彿ほうふつと見えそうな気がしたからです。

が、東京の町で不思議なのは、銀座通りに落ちている紙屑ばかりじゃありません。夜更けて乗る市内の電車でも、時々尋常の考に及ばない、妙な出来事に遇うものです。その中でも可笑おかしいのは人気ひとけのない町を行く赤電車や青電車が、乗る人もない停留場へちやんと止まる事でしょう。これも前の紙屑同様、疑わしいと御思いになつたら、今夜でもためして御覧なさい。同じ市内の電車でも、動坂線どうざかせんと巣鴨線すがもせんと、この二つが多いようですが、つい四五日前の晩も、私の乗った赤電車が、やはり乗降りのない停留場へぱったり止まってしまったのは、その動坂線の団子坂だんござか下で

す。しかも車掌がベルの綱へ手をかけながら、半ば往来の方へ体を出して、例のごとく「御乗りですか。」と声をかけたじやありませんか。私は車掌台のすぐ近くにいましたから、すぐに窓から外を覗いて見ました。と、外は薄雲のかかった月の光が、朦朧もうろうと漂っているだけで、停留場の柱の下は勿論、両側の町家がことごとく戸を鎖とした、真夜中の広い往来にも、さらに人間らしい影は見えません。妙だなと思う途端、車掌がベルの綱を引いたので、電車はそのまま動き出しましたが、それでもまだ窓から外を眺めていると、停留場が遠くなるのに従って、今度は何となく私の眼にも、その月の光の中に、だんだん小さくなって行く人影があるような気がしました。これは申すまでもなく、私の神経の迷か

もしれませんが、あの先を急ぐ赤電車の車掌が、どうして乗る人もない停留場へ電車を止めなどしたのでしよう。しかもこんな目に遇つたのは、何も私ばかりじゃなく、私の知人の間にも、三四人はいようと云うのです。して見ると、まさか電車の車掌がその度に寝惚ねぼけたとも申されますまい。現に私の知人の一人などは、車掌をつかまえて、「誰もいないじゃないか。」と、きめつけると、車掌も不審そうな顔をして、「大勢さんのように思いましたか。」と、答えた事があるそうです。

そのほかまだ数え立てれば、砲兵工こう廠しょうの煙突の煙が、風向きに逆つて流れたり、撞つく人もないニコライの寺の鐘が、真夜中に突然鳴り出したり、同じ番号の電車が二台、前後して日の暮の

日本橋を通りすぎたり、人っこ一人いない国技館の中で、毎晩のよう到大勢の喝采かつさいが聞えたり、——所謂いわゆる「自然の夜の側面」は、ちようど美しい蛾がの飛び交うように、この繁華な東京の町々にも、絶え間なく姿を現しているのです。従つてこれから私が申上げようと思う話も、実はあなたが御想像になるほど、現実の世界と懸け離れた、徹頭徹尾あり得べからざる事件と云う次第ではありません。いや、東京の夜の秘密を一通り御承知になつた現在なら、無下むげにはあなたも私の話を、莫迦ぼかになさる筈はありますまい。もしまたしまいまで御聞きになつた上でも、やはり鶴屋南つるやなんぼ北く以来の焼酎しょうちゆうび火ひの勻においがするようだったら、それは事件そのものに嘘があるせいと云うよりは、むしろ私の申し上げ方が、ポ

オやホフマンの墨るいを摩ますほど、手に入っていない罪だろうと思ひます。何故と云えば一二年以前、この事件の当事者が、ある夏の夜私と差向いで、こうこう云う不思議に出遇つた事があると、詳しい話をしてくれた時には、私は今でも忘れられないほど、一種ようきの妖気とも云うべき物が、陰々として私たちのまわりを立て罩こめたような気がしたのですから。

この当事者と云う男は、平常私の所へ出入をする、日本橋辺のある出版書肆しよしの若主人で、ふだんは用談さえすませてしまふと、そうそう

々帰つてしまふのですが、ちようどその夜は日の暮からさつと一雨かかったので、始は雨止みを待つ心算つもりでも、いつになく腰を落着けたのでしよう。色の白い、眉の迫つた、瘦やせぎすな若

主人は、ぼんちようちん盆提灯へ火のはいつた縁先のうす明りにかしこまつて、かれこれ初夜も過ぎる頃まで、よもやま四方山の世間話をして行きました。その世間話の中へ挟みながら、「是非一度これは先生に聞いて頂きたいと思つて居りましたが。」と、ほとんど心配そうな顔色で徐に口を切つたのが、申すまでもなく本文の妖婆の話だったので。私は今でもその若主人が、上布の肩から一なすり墨をばかしたような夏羽織で、すいか西瓜の皿を前にしながら、まるで他聞でも憚るように、はばか小声でひそひそ話し出した容子が、はつきりと記憶に残っています。そう云えばもう一つ、その頭の上の盆提灯が、豊かな胴へ秋草の模様をほんのりとあかる明く浮かせた向うに、雨上りの空がむら雲をだだ黒く一面に乱していたのも、やはり妙に

身にしみて、忘れる事が出来ません。

そこで肝腎かんじんの話と云うのは、その新蔵しんぞうと云う若主人が（ほかに差障りがあるといけませんから、仮にこう呼んで置きましたよ。）二十三の夏にあつた事で、当時本所一つ目辺に住んでいた神下しの婆の所へ、ちと心配な筋があつて、伺いを立てに行つたと云う、それが抑々そもそもの発端なのです。何でも六月の下旬ある日、新蔵はあの界隈かいわいに呉服屋を出している、商業学校時代の友だちを引張り出して、一しよに与兵衛鮨よべえずしへ行つたのだそうですが、そこで一杯やっている内に、その心配な筋と云うのを問わず語り話して聞かせると、その友だちの泰たいさんと云うのが急に真面目な顔をして、「じやお島婆さんに見て貰い給え。」と、熱心に勧め

出しました。そこで仔細しさいを聞いて見ると、この神下しの婆と云うのは、二三年前に浅草あたりから今の所へ引越して来たので、占もすれば加持かじもする——それがまた飯綱いづなでも使うのかと思うほど、靈れい頭けんがあると云うのです。「君も知っているだろう。ついでこの間魚政の女隠居が身投げをした。——あの屍骸しがいがどうしても上らなかつたんだが、お島婆さんにお札ふだを貰つて、それを一の橋から川へ抛りこむと、その日の内に浮いて出たじゃないか。しかも御札を抛りこんだ、一の橋の橋はし杭くいの所にさ。ちようど日の暮の上げ潮だったが、仕合せとあすこにもやっていた、石船の船頭が見つけてね。さあ、御客様だ、土左衛門だと云う騒ぎで、早速橋詰の交番へ届けたんだらう。僕が通りかかった時にや、もう巡

查が来ていたが、人ごみの後から覗いて見ると、上げたばかりの女隠居の屍骸が、あらごも荒菰をかぶせて寝かしてある、その菰の下から出た、水ぶくれの足の裏には、何だと思う、君？ あの御札がぴったり斜はすっかけに食附いていたんだ。僕はさすがにぞっとしたね。」——と云う友だちの話を聞いた時には、新蔵もやはり背中が寒くなつて、夕潮の色だの、橋杭の形だの、それからその下に漂っている女隠居の姿だの——そんな物が一度に眼の前へ、浮んで来たような気がしたそうです。が、何しろ一杯機嫌で、「そりや面白い。是非一つ見て貰おう。」と、負惜しみの膝を進めました。「じゃ僕が案内しよう。この間金談を見て貰いに行つて以来、今じやあの婆さんとも大分懇意になつているから。」「何分頼む

。「——こう云う調子で、啣くわえ楊枝ようじのまま与兵衛を出ると、妻むぎわ藁帽らぼうし子に梅雨晴の西日をよけて、夏外套の肩を並べながら、ぶらりとその神下しの婆の所へ出かけたと云います。

ここでその新蔵の心配な筋と云うのを御話しますと、家に使っていた女中の中に、お敏としと云う女があつて、それが新蔵とは一年越互に思い合っていたのですが、どうした訣わけか去年の暮に叔母の病気を見舞いに行つたぎり、音沙汰もなくなつてしまつたのです。驚いたは新蔵ばかりでなく、このお敏に目をかけていた新蔵の母親も心配して、請うけにん人を始め伝手つてから伝手へ、手を廻して探しましたが、どうしても行く方が分りません。やれ、看護婦になつてゐるのを見たの、やれ、妾めかけになつたと云う噂があるの、と、取沙

汰だけはいろいろあつても、さて突きつめた所になると、皆目かいもくどうなつたか知れないのです。新蔵は始氣遣きづかつて、それからまた腹を立てて、この頃ではただぼんやりと沈んでいるばかりになりましたが、その元氣のない容子が、薄々ながら二人の關係を感じていた母親には、新しい心配の種になつたのでしよう。芝居へやる。湯治を勧める。あるいは商売附合いの宴会へも父親の名代を勤めさせる——と云つた具合に骨を折つて、無理にも新蔵の浮かない気分を引き立てようとし始めました。そこでその日も母親が、本所界隈の小売店を見廻らせると云うのは口実で、実は気晴らしに遊んで来いと云わないばかり、紙入の中には小遣いの紙幣しへいまで入れてくれましたから、ちやうど東両国に幼馴染おきななじみがあるの

を幸、その泰さんと云うのを引張り出して、久しぶりに近所の与兵衛鮎へ、一杯やりに行つたのです。

こう云う事情がありましたから、お島婆さんの所へ行くと云つても、新蔵のほろ酔よひの腹の底には、どこか真剣な所があつたのでしよう。一つ目の橋の袂を左へ切れて、人通りの少いたてかわ竖川河岸を二つ目の方へ一町ばかり行くと、左官屋と荒物屋との間に挟はさまって、竹格子たけごうしの窓のついた、煤だらけの格子戸造りが一軒ある——それがあの神下しの婆の家だと聞いた時には、まるでお敏と自分との運命が、この怪しいお島婆さんの言葉一つできまりそうな、無気味な心もちが先に立って、さっきの酒の酔などは、すっかりもう醒めてしまったそうです。また実際そのお島婆さんの家

と云うのが、見たばかりでも気が滅入りめいりそうな、庇ひさしの低い平家建で、この頃の天気の色が出た雨落ちの石の青苔あおごけからも、菌きのこぐらいは生えるかと思うぐらい、妙にじめじめしていました。その上隣の荒物屋との境にある、一抱あまりの葉柳が、窓も蔽うほど枝垂れていますから、瓦にさえ暗い影が落ちて、障子しょうじ一重隔ひとえてた向うには、さもただならぬ秘密が潜んでいそうな、陰森いんしんとしたけはいがあつたと云います。

が、泰さんは一向無頓着に、その竹格子の窓の前へ立止ると、新蔵の方を振り返つて、「じやいよいよ鬼婆に見参まゐと出かけるかな。だが驚いちゃいけないぜ。」と、今更らしい嚇おどしを云うのです。新蔵は勿論嘲笑あざわら笑つて、「子供じやあるまいし。誰が婆さんくら

いに恐れるものか。」と、うつちやるように答えましたが、泰さんは反つてその返事に人の悪るそうな眼つきを返しながら、「何さ。婆さんを見たんじや驚くまいが、ここには君なんぞ思いもよらない、別嬪べっぴんが一人いるからね。それで御忠告に及んだんだよ。」と、こう云う内にもう格子へ手をかけて、「御免。」と、勢の好い声を出しました。するとすぐに「はい。」と云う、含み声の答があつて、そつと障子を開けながら、入口の梱しきみに膝をついたのは、憐しいしおち十七八の娘です。成程これじや、泰さんが、「驚くな」と云つたのも、さらに不思議はありません。色の白い、鼻筋の透つた、生はえぎわ際の美しい細面で、殊に眼が水々しい。——が、どこかその顔立ちにも、痛々しいやつ窶れが見えて、撫なで子を散らし

ためりんすの帯さえ、派手な紺緋の単衣の胸をせめそうな気がしたそうです。泰さんは娘の顔を見ると、麦藁帽子を脱ぎながら、「阿母おつかさんは？」と尋ねました。すると娘は術なさそうな顔をして、「生あいにく憎出まして留守でございませうが。」と、さも自分が悪い事でもしたように、まぶた眦を染めて答えましたが、ふと涼しい眼を格子戸の外へやると、急に顔の色が変つて、「あら。」と、かすかに叫びながら、飛び立とうとしたじやありませんか。泰さんは場所が場所だけに、さては通り魔でもしたのかと思つたそうです。が、慌てて後を振返ると、今まで夕日の中に立っていた新蔵の姿が見えません。と、二度びつくりする暇もなく、泰さんの袂にすがつたのは、その神下しの婆の娘で、それが息をはずませながら、

一生懸命な声で云うのを聞くと、「あなた。今の御連れ様にどうかそう仰おっしゃ有つて下さいまし。二度とこの近所へ御立寄りなすつちやいけません。さもないと、あの方の御命にも関るような事が起りますから。」と、こう切れ切れに云うのだそうです。泰さんは何が何やら、まるで煙に捲かれた体で、しばらくはただ呆あつけ氣にとられていましたが、とにかく、言ことづつ伝てを頼まれた体なので、

「よろしい。確かに頼まれました。」と云つたきり、よくよく狼ろ狽うばいしたのでしよう。麦藁帽子もぶら下げたまま、いきなり外へ飛び出すと、新蔵の後を追いかけて、半町ばかり駈け出しました。

その半町ばかり離れた所が、ちようど寂しい石河岸の前で、上の方だけ西日に染まった、電柱のほかには何も無い——そこに新蔵

はしよんぼりと、夏外套の袖を合せて、足元を眺めながら、佇たたずんでいました。が、やっと駈けつけた泰さんが、まだ胸が躍つていると云う調子で、「冗談じゃないぜ。驚くなど云つた僕の方が、どのくらい君に驚かされたか知れやしない。一体君はあの別嬪べっぴんを——」と云いかけると、新蔵はもう一つ目橋の方へ落着かない歩みを運びながら、「知つているとも。あれが君、お敏としなんだ。」と、興奮した声で答えたそうです。泰さんは三度びつくりした——びつくりした筈でしょう。何しろこれからその行方を見て貰おうと云う当の女が、人もあろうにお島婆さんの娘だと云う騒ぎなのでですから。と云つて泰さんもその娘に頼まれた、容易ならぬ言伝ての手前、驚いてばかりもいられますまい。そこで麦藁帽子

をかぶるが早いか、二度とこの界限へは近づくなと云うお敏の言葉を、声色同様に饒舌しゃべつて聞かせました。新蔵はその言葉を静に聞いていましたが、やがて眉を顰しかめると、迂散うさんらしい眼つきをして、「来てくれるなど云うのはわかるけれど、来れば命にかかわると云うのは不思議じゃないか。不思議よりやむしろ乱暴だね。」と、腹を立てたような声を出すのです。が、泰さんもただ言伝ただてを聞いただけで、どうした訣わけとも問い質たさずに、お島婆さんの家を駈け出したのですから、いくら相手を慰めたくも、好い加減な御座なりを並べるほかは、慰めようがありません。すると新蔵はなおさらの事、別人のように黙りこんで、さつさと歩みを早めたようですが、その内にまた与兵衛鮪の旗の出ている下へ来ると、

急に泰さんの方をふり向いて、「僕はお敏に逢つてくりや好かつた。」と、残念らしい口吻を洩しました。その時泰さんが何気なく、「じゃもう一度逢いに行くさ。」と、調戯からかうようにこう云つた——それが後になつて考えると、新蔵の心に燃えている、焰のような逢いたさへ、油をかける事になつたのでしよう。ほどなく泰さんに別れると、すぐ新蔵が取つて返したのは、回向院前えこういんの坊主軍鶏ぼうずしやもで、あたりが暗くなるのを待ちながら、銚子も二三本空にしました。そうして日がとつぷり暮れると同時に、またそこを飛び出して、酒臭い息を吐きながら、夏外套の袖を後へ刎はねて、押しかけたのはお敏の所——あの神下しの婆の家です。

それが星一つ見えない、暗の夜で、悪く地息じいきが蒸れる癖に、時

々ひやりと風が流れる、梅雨中にありがちな天気でした。新蔵は勿論中つ腹で、お敏の本心を聞かない内は、ただじや帰らないくらいな氣組でしたから、墨を流した空に柳が聳えて、その下に竹格子の窓が灯をともした、底氣味悪い家の容子ようすにも頓着せず、いきなり格子戸をがらりとやると、狭い土間に突立つて、「今晚は。」と一つ怒鳴ったそうです。その声を聞いたばかりでも、誰だろうくらいな推量はすぐについたからでしょう。あの優しい含み声の返事も、その時は震えていたようですが、やがて静に障子が開くと、しきみ梱越しに手をついた、やつやつしいお敏の姿が、次の間からさす電燈の光を浴びて、今でも泣いているかと思うほど、悄悄とそこへ現れました。が、こちらは元より酒の上で、麦藁帽子

を阿弥陀あみだにかぶったまま、邪慳じゃけんにお敏を見下しながら、「ええ、
 阿母おつかさんは御在宅ですか。手前少々見て頂きたい事があつて、上
 ったんですが、——御覧下さいますか、いかがなものでしょう。
 御取次。」と、白々しくずつきり云つた。——それがどのくらい
 つらかつたのでしよう、お敏はやはり手をついたまま、消え入り
 たそうに肩を落して、「はい。」と云つたぎりしばらくは涙を呑
 んだようでしたが、もう一度新蔵が虹のような酒気を吐いて、
 「御取次。」と云おうとすると、襖ふすまを隔てた次の間から、まるで
 墓がまつぶやが呟くように、「どなたやらん、そこな人。遠慮のうちこちへ通
 らつしやれ。」と、力のない、鼻へ抜けた、お島婆さんの声が聞
 えました。そこな人も凄じい。お敏を隠した発頭人。まずこいつ

をとつちめて、——と云う権幕でしたから、新蔵はずいと上りぎまに、夏外套を脱ぎ捨てると、思わず止めようとしたお敏の手へ、麦藁帽子を残したなり、昂然と次の間へ通りました。が、可哀そうなのは後に残ったお敏で、これは境の襖の襖側にぴったりと身を寄せたまま、夏外套や麦藁帽子の始末をしようと云う方角もなく、涙ぐんだ涼しい眼に、じつと天井を仰ぎながら、華奢きゃしゃな両手を胸へ組んで、頻しきりに何か祈念でも凝らしているように見えたそうです。

さて次の間へ通った新蔵は、遠慮なく座蒲団を膝へ敷いて、横お柄うへいにあたりを見廻すと、部屋は想像していた通り、天井も柱も煤の色をした、見すばらしい八畳でしたが、正面に浅い六尺の床

があつて、ばさくらだいじん婆娑羅大神と書いた軸の前へ、御鏡が一つ、御酒徳利
 が一對、それから赤青黄の紙を刻んだ、小さな幣へいそく束が三四本、
 恭しげに飾つてある、——その左手の縁側の外は、すぐに豎川の
 流でしよう。思いなしか、立て切つた障子に響いて、かすかな水
 の音が聞えました。さて肝腎の相手はと見ると、床の前を右はずへ外
 して、菓子折、サイダア、砂糖袋、玉子の折などの到来物が、ず
 らりと並んでいるたんす箆笥の下に、大柄な、切髪の、鼻が低い、口の
 大きな、青ぶくん膨れに膨れた婆が、黒地の単衣の襟を抜いて、まつげ睫毛
まばらの疎な目をつぶつて、水気の来たような指を組んで、もつりよう魍 魎の
 ごとくのつさりと、畳一ぱいに坐っていました。さつきこの婆の
 ものを云う声がまが、墓のがま眩くようだったと云いましたが、こうして

坐っているのを見ると、墓も墓、容易ならない墓の怪が、人間の姿を装って、毒気を吐こうとしているとでも形容しそうな気色ですから、これにはさすがの新蔵も、頭の上の電燈さえ、光が薄れるかと思うほど、すさま凄しげな心もちがして来たそうです。

が、勿論それくらいな事は、重々覚悟の前でしたから、「じゃ一つ御覧を願いたい。縁談ですがね。」と、きつぱり云った。――その言葉が聞えないのか、お島婆さんはやつと薄眼を開いて、片手を耳へ当てながら、「何の、縁談の。」と繰返しましたが、やはり同じようなぼやけた声で、「おぬし、女が欲しいでの。」と、のつけから鼻で笑ったと云います。新蔵はじりじり業の煮えるのをこらえながら、「欲しいからこそ、見て貰うんです。さも

なけりや、誰がこんな——」と、柄からにもない鉄火な事を云つて、こちらも負けずに鼻で笑いました。けれども婆は自若として、まるで蝙蝠こうもりの翼のように、耳へ当てた片手を動かしながら、「怒らしやるまいてや。口が悪いはわしが癖じやての。」と、まだ半ばせせら笑うように、新蔵の言葉を遮さえぎりましたが、それでもようやく調子を改めて、「年はの。」と、仔細しさいらしく尋ねたそうです。「男は二十三——酉年です。」「女はの。」「十七。」「卯年よの。」「生れ月つきは——」「措おかつしやい。年ばかりでも知りよの。」「婆はこう云いながら、二三度膝の上の指を折つて、星でも数えるようでしたが、やがて皮のたるんだ眶まぶたを挙げて、ぎよろりと新蔵へ眼をくれると、「成らぬてや。成らぬてや。成らぬてや。大凶も大

凶よの。」と、まず大仰に嚇おどかして、それからまた独り呶うくよう
に、「この縁を結んだらの、おぬしにもせよ、女にもせよ、必ず
一人は身を果そうじや。」と、云い切つたらうじやありませんか。
かつとしたのは新蔵で、さてこそ命にかかわると云つたのは、こ
の婆の差金だろうと、見てとつたから、我慢が出来ません。じり
りと膝を向け直すと、まだ酒臭い顛あごをしやくつて、「大凶結構。
男が一度惚れたからにや、身を果すくらいは朝飯前です。火難、
剣難、水難があつてこそ、惚れ栄えもあると御思いなさい。」と、
嵩かさにかかつて云い放しました。すると婆はまた薄眼になつて、厚
い唇をもぐもぐ動かしながら、「なれども、男に身を果された
女はどうじや。まいてよ、女に身を果された男はの、泣こうてや。

吼えようてや。」と、嘲笑うような声で云うのです。おのれ、お敏の体に指一本でもさして見る——と氣負つた勢いで、新蔵は婆を睨めつけながら、「女にや男がついています。」と、真向からきめつけると、相手は相不変手を組んだまま、悪く光沢のある頬をにやりとやって、「では男にはの。」と、嘯くように問い返しました。その時は思わずぞつとしたと、新蔵が後で話しましたが、これは成程あの婆に果し状をつけられたようなのですから、氣味が悪かつたのには、相違ありますまい。しかもそう問い返した後で、婆は新蔵のひるんだ氣色を見ると、黒い単衣の襟をぐいと抜いて、「いかにおぬしが拙ろうとももの、人間の力には天然自然の限りがあるてや。悪あがきは思い止らっしやれ。」と、

猫撫ねこなで声を出しましたが、急にもう一度大きな眼を仇白く見開いて、「それ、それ、証拠は目のあたりじゃ。おぬしにはあのため息が聞えぬかいの。」と、今度は両手を耳へ当てながら、さも一大事らしく囁いたと云うのです。新蔵は我知らず堅くなって、じつと耳を澄ませましたが、襖一重向うに隠れている、お敏のけいを除いては、何一つ聞えるものもありません。すると婆は益々眼をぎよろつかせて、「聞えぬかいの。おぬしのような若いのが、そこな石河岸いしがしの石の上で、ついているため息が聞えぬかいの。」と、次第に後の箆笥に映った影も大きくなるかと思うほど、膝を進めて来ましたが、やがてその婆臭においい匂が、新蔵の鼻を打つたと思うと、障子も、襖も、御酒徳利も、御鏡も、箆笥も、座蒲団も、

すべて陰々とした妖氣の中に、まるで今までとは打つて変つた、怪しげな形を現して、「あの若いのもおぬしのように、おのが好す色心きんころに目が眩くらんでの、この婆つかに憑つらせられた婆娑羅ばさらの大神さかろに逆うたてや。されば立ち所に神罰を蒙つて、瞬く暇に身を捨ちようでの。おぬしには善い見せしめじゃ。聞かつしやれ。」と云う声はえが、無数の蠅はえの羽音のように、四方から新蔵の耳を襲つて来ました。その拍子に障子の外の豎川へ、誰とも知れず身を投げた、けたたましい水音が、宵闇を破つて聞えたそうです。これに荒胆あらぎもを挫がれた新蔵は、もう五分とその場に居たたまれず、捨台辞すてぜりふを残すのもそこそこで、泣いているお敏さえ忘れたように、踰そうろ跟うとお島婆さんの家を飛び出しました。

さて日本橋の家へ帰つて、明くる日起きぬけに新聞を見ると、果して昨夜豎川に身投げがあつた。——それも亀かめざわ沢町の樽屋の息子で、原因は失恋、飛びこんだ場所は、一の橋と二の橋との間にある石河岸と出ているのです。それが神経にこたえたのでしよう。新蔵は急に熱が出て、それから三日ばかりと云うものは、ずっと床についていました。が、寝ていても気にかかるのは、申すまでもなくお敏の事で、勿論今となつて見れば、何も相手が心變りをしたと云う訣わけじゃなく、突然暇をとつたのも、二度とこの界限へ来てくれるなど云つたのも、皆お島婆さんの作略に相異なるのですから、今更のようにお敏を疑つたのが恥しくもなつて来ますし、また一方ではこの自分に何の怨うらみもないお島婆さんが、何故

そんな作略をめぐらすのだから、不思議で仕方がなかったそうです。それにつけても一人身投げをさせて見ているような、鬼婆としよにいるのじゃ、今にもお敏は裸のまま、婆娑羅ばさらの大神が祭つてある、あの座敷の古柱へ、ぐるぐる巻まくに括くくりつけられて、松まつば葉いぶしぐらいにはされ兼ねますまい。そう思うともう新蔵は、

おちおち寝てもいられないような気がしますから、四日目には床を離れるが早いか、とにもかくにも泰たいさんの所へ、知恵を借りに出かけようとする、ちようどそこへその泰さんの所から、電話がかかって来たじゃありませんか。しかもその電話と云うのが、ほかならないお敏の一件で、聞けば昨夜遅くなってから、泰さんの所へお敏が来た。そうして是非一度若旦那に御目にかかって、

委細の話をしたいのだが、以前奉公していた御店へ、電話もまさかかけられないから、あなたに言伝ことづてを頼みたい——と云う用向きだったそうです。逢いたいのは、こちらと同じ思いですから、新蔵はほとんど送話器にすぎりつきそうな勢いで、「どこで逢うと云うんだろう。」と、一生懸命に問いかけますと、能弁な泰さんは、「それがさ、」とゆっくり前置きをして、「何しろあんな内気な女が、二三度会ったばかりの僕の所へ、尋ねて来ようと云うんだから、よくよく思い余つての上なんだろう。そう思うと、僕もすっかりつまされてしまつてね、すぐに待合をとも考えたんだが、婆の手前は御湯へ行くと云つて、出て来るんだと聞いて見りや、川向うは少し遠すぎるし——と云つてほかに然るべき所も

ないから、よろしい、僕の所の二階を明渡しませうと云つたんだが、余り恐れ入りますからとか何とか云つて、どうしても承知しない。もつともこりや気兼ねをするのも、無理はないと思つたから、じやどこかにお前さんの方に、心当りの場所でもありませんか。急いで尋ねると、急に赤い顔をしたがね。小さな声で、明日の夕方、近所の石河岸いしがしまで若旦那様に来て頂けないでしょうかと云うんだ。野天の逢あひびき曳は罪がなくなつて好い。」と、笑を噛み殺した容子ようすでした。が、元より新蔵の方は笑う所の騒ぎじゃなく、「じや石河岸ときまつたんだね。」と、もどかしそうに念を押すと、仕方がないから、そうきめて置いた、時間は六時と七時との間、用が済んだら、自分の所へも寄つてくれと云う返事です。新

蔵は礼と一しよに承知の旨を答えると、早速電話を切りましたが、さあそれから日の暮までが、待遠しいの、待遠しくないのじやありません。算盤そろばんを弾く。帳合いを手伝う。中元の進物の差図さしずをする。——その合間には、じれったそうな顔をして、帳場格子の上にある時計の針ばかり気にしていました。

そう云う苦しい思いをして、やっと店をぬけ出したのは、まだ西日の照りつける、五時少し前でしたが、その時妙な事があつたと云うのは、小僧の一人が揃えて出した日和下駄ひよりげたを突かけて、新刊書類の建看板が未^に生乾きのペンキの勻においを漂わしている後から、アスファルトの往来へひよいと一足踏み出すと、新蔵のかぶつてゐる麦藁帽子ひさしの底をかすめて、蝶が二羽飛び過ぎました。烏羽揚うばあ

羽げと云うのでしよう。黒い翅はねの上に気味悪く、青い光沢がかつた蝶なのです。勿論その時は格別気にもしないで、二羽とも高い夕日の空へ、揉み上げられるようになって見えなくなるのを、ちらりと頭の上に仰ぎながら、折よく通りかかった上野行の電車へ飛び乗ってしまいました。さて須田町で乗換えて、国技館前で降りて見ると、またひらひらと麦藁帽子にまつわるのは、やはり二羽の黒い揚羽でした。が、まさか日本橋からここまで蝶が跡をつけて、来ようなどとは考えませんから、この時もやはり気にとめずに、約束の刻限にはまだ余裕もあるかと云うので、あれから一つ目の方へ曲る途中、看板やぶに藪やぶとある、小綺麗な蕎麦屋そばやを一軒見つけて、仕度かたがた旁々かたがたはいったそうです。もつとも今日は謹んで、

酒は一滴も口にせず、妙に胸が悶えるのを、やっと冷麦ひやむぎを一つ平げて、往來の日足が消えた時分、まるで人目を忍ぶ落人のように、こつそり暖簾のれんから外へ出ました。するとその外へ出た所を、追いつがるごとくさつと来て、おやと思う鼻の先へ一文字に舞い上ったのは、今度も黒天鷲絨くろびろうどの翅の上に、青い粉を刷いたような、一對の烏羽揚羽なのです。その時は気のせいか、額へ羽搏った蝶の形が、冷やかに澄んだ夕暮の空気を、烏ほどの大きさに切抜いたかと思いましたが、ぎよつとして思わず足を止めると、そのまますつと小さくなつて、互にからみ合いながら、見る見る空の色に紛れてしまいました。重ね重ねの怪しい蝶の振舞に、新蔵もさすがに怯気おしげがさして、悪く石河岸なぞへ行つて立つていたら、身

でも投げたくなりはしないかと、二の足を踏む気さえ起つたと云います。が、それだけまた心配なのは、今夜逢いに来るお敏の身の上ですから、新蔵はすぐに心をとり直すと、もう黄昏たそがれの人影が蝙蝠のようにちらほらする回向院前の往来を、側目もふらずまっすぐに、約束の場所へ駈けつけました。所が駈けつけるともう一度、御影みかげの狢こまいぬ犬が並んでいる河岸の空からふわりと来て、青光りをする翹と翹とがもつれ合つたと思う間もなく、蝶は二羽とも風になぐれて、まだ薄明りの残っている電柱の根元で消えたさうです。

ですからその石河岸の前をぶらぶらして、お敏の来るのを待つている間も、新蔵は気が気じやありません。麦藁帽子をかぶり直

したり、袂たもとへ忍ばせた時計を見たり、小一時間と云うものは、さつき店の帳場格子の後にいた時より、もつと苛いらだ立たしい思いをさせられました。が、いくら待つてもお敏の姿が見えないので、我知らず石河岸の前を離れながら、お島婆さんの家の方へ、半町ばかり歩いて来ると、右側に一軒洗湯があつて、大きく桃の実を描いた上に、万病根治桃葉湯と唐めかした、ペンキ塗りの看板が出ています。お敏が湯に行くのを口実に、家を出ると云つたのは、この洗湯じゃないかと思う。——ちようどその途端に女湯のれんの暖簾のれんをあげて、夕闇の往来へ出て来たのは、紛れもないお敏でした。なりはこの間と変りなく、撫なで子しこ模も様ようのめりんすの帯おびに紺こん 紺こんの単衣たんいでしたが、今夜は湯上りだけに血色も美しく、銀杏いちょう返がえし

の鬢びんのあたりも、まだ濡れているのかと思うほど、艶々と櫛目くしめを見せています。それが濡手拭と石鹼の箱とをそつと胸へ抱くようにして、何が怖いのか、往來の右左へ心配そうな眼をくばりましたが、すぐに新蔵の姿を見つけたのでしよう。まだ気づかわしそうな眼でほほ笑むと、つと蓮はす葉はに男の側へ歩み寄つて、「長い事御待たせ申しまして。」と便なさそうに云いました。「何、いくらも待ちやしない。それよりお前、よく出られたね。」新蔵はこう云いながら、お敏と一しよに元來た石河岸の方へゆつくり歩き出しましたが、相手はやはり落着かない容子で、そわそわ後ばかり見返りますから、「どうしたんだ。まるで追手でもかかりそうな風じゃないか。」と、わざと調戲からかうように声をかけますと、

お敏は急に顔を赤らめて、「まあ私、折角いらしって下すつた御礼も申し上げないで——ほんとうによく御出で下さいました。」と、それでも不安らしく答えるのです。そこで新蔵も気がかりになつて、あの石河岸へ来るまでの間に、いろいろ仔細を尋ねましたが、お敏はただ苦しそうな微笑を洩らして、「こうしている所が見つかつて御覧なさいまし。私ばかりかあなたまで、どんな恐しい目に御遇いになるか知れたものではございませんよ。」と、それだけの返事しかしてくれません。その内にもう二人は、約束の石河岸の前へ来かかりましたが、お敏は薄暗がりにつくばつている御影みかげの狛犬こまいぬへ眼をやると、ほつと安心したような吐息をついて、その下をだらだらと川の方へ下りて行くと、根府川石ねぶかわいしが何

本も、船から挙げたまま寝かしてある——そこまで来て、やっと立止ったそうです。恐る恐るその後から、石河岸の中へはいった新蔵は、例の狛犬の陰になって、往來の人目にかからないのを幸^{さいわい}夕じめりのした根府川石の上へ、無造作^{むぞうさく}に腰を下しながら、「私の命にかかわるの、恐しい目に遇うのつて、一体どうしたと云う訣^{わけ}なんだい。」と、またさっきの返事を促しました。するとお敏はしばらくの間、蒼黒く石垣を浸している豎^{たて}川^{かわ}の水を見渡して、静に何か口の内で祈念しているようでしたが、やがてその眼を新蔵に返すと、始めて、嬉しそうに微笑して、「もうここまで来れば大丈夫でございますよ。」と、囁くように云うじやありませんか。新蔵は狐につままれたような顔をして、無言のままお敏の顔

を見返しました。それからお敏が、自分も新蔵の側へ腰をかけて、途切れ勝とぎにひそひそ話し出したのを聞くと、成程二人は時と場合で、命くらいは取られ兼ねない、恐しい敵を控えているのです。

元来あのお島婆さんと云うのは、世間じや母親のように思っています。実は遠縁の叔母とかで、お敏の両親が生きていた内は、つき合いさえしなかつたものだそうです。何でも代々宮大工だつたお敏の父親に云わせると、「あの婆は人間じやねえ。嘘だと思つたら、横つ腹を見る。魚の鱗うろこが生えてやがるじやねえか。」とかで、往来でお島婆さんに遇つたと云つても、すぐに切火きりびを打つたり、浪なみの花を撒まいたりするくらいでした。が、その父親が歿くわなつて間もなく、お敏には幼馴染おさなじみで母親には姪めいに当る、ある病

身な身なし児の娘が、お島婆さんの養女になったので、自然お敏の家とあの婆の家との間にも、親類らしい往来が始まったのです。けれどもそれさえほんの一二年で、お敏は母親に死なれると、世話をする兄弟もなかったので、百ヶ日もまだすまない内に、日本橋の新蔵の家へ奉公する事になりましたから、それぎりお島婆さんとも交渉が絶えてしまいました。そう云うあの婆の所へ、どうしてまたお敏が行くようになったかは、後で御話しする事にしましょう。

ところでお島婆さんの素性はと云うと、歿くなった父親にでも聞いて見たらともかく、お敏は何も知りませんが、ただ、昔から口寄せの巫女みこをしていたと云う事だけは、母親か誰かから聞いて

いました。が、お敏が知ってからは、もう例の婆娑羅ばさらの大神と云う、怪しい物の力を借りて、加持かじや占をしていたそうです。この婆娑羅の大神と云うのが、やはりお島婆さんのように、何とも素性の知れない神で、やれ天狗てんぐだの、狐だのと、いろいろ取沙汰もありましたが、お敏にとっては産土神うぶすながみの天満宮の神主などは、必ず何か水府のものに相違ないと云っていました。そのせいかお島婆さんは、每晚二時の時計が鳴ると、裏の縁側から梯子はしご伝いに、豎川の中へ身を浸して、ずっぷり頭まで水に隠したまま、三十分あまりもはいつている——それもこの頃の陽気ばかりだと、さほどこたえはしますまいが、寒中でもやはり湯巻き一つで、紛々と降りしきる霏みぞれの中を、まるで人面の獺うそのように、ざぶりと水へは

いると云うじやありませんか。一度などはお敏が心配して、電燈を片手に雨戸を開けながら、そつと川の中を覗いて見たら、向う岸の並蔵の屋根に白々と雪が残っているだけ、それだけ余計黒い水の上に、婆の切髪の頭だけが、浮巢のように漂っていたそうです。その代りこの婆のする事は、加持でも占でも験げんがある——と云うと、善い方ばかりのようですが、この婆に金を使って、親とか夫とか兄弟とかを呪のろい殺したのもも大勢いました。現にこの間この石河岸から身を投げた男なぞも、同じ柳橋の芸者とかに思をかけたある米問屋の主人の頼みで、あの婆が造作もなく命を捨てさせてしまったのだそうです。が、どう云う秘密な理由があるのか、一人でもそこで呪い殺された、この石河岸のような場所にな

ると、さすがの婆の加持祈祷でも、そのまわりにいる人間には、害を加える事が出来ません。のみならず、そこでしている事は、千里眼同様な婆の眼にも、はいらずにすむようですから、それでお敏は新蔵を、わざわざこの石河岸へ呼び寄せたと云う次第なのです。

ではどう云う訣わけでお島婆さんが、それほどお敏と新蔵との恋の邪魔をするかと云いますと、この春頃から相場の高低を見て貰いに来るある株屋が、お敏の美しいのに目をつけて、大金を餌にあの婆を釣った結果、妾めかけにする約束をさせたのだそうです。が、それだけなら、ともかくも金で埒らちの開く事ですが、ここにもう一つ不思議な故障があるのは、お敏を手離すと、あの婆が加持も占も

出来なくなる。——と云うのは、お島婆さんがいざ仕事にとりかかるとなると、まずその婆娑羅の大神をお敏の体に祈り下して、かみがか神憑りになったお敏の口から、一々差図を仰ぐのだそうです。これは何もそうしなくとも、あの婆自身が神憑りになったらよさそうに思われますが、そう云う夢とも現ともうつつつかない恍惚こうこうの境にはいったものは、その間こそ人の知らない世界の消息にも通じるものの、醒めたが最後、その間の事はすっかり忘れてしまいますから、仕方がなくお敏に神を下して、その言葉を聞くのだとか云う事でした。こう云う事情がある以上、あの婆がお敏を手離さないのも、まずもつともと云わなければなりません。ところが株屋の方はまたそれがつけ目なので、お敏を妾にする以上、必ず

お島婆さんもついて来るに相違ありませんから、そこでこれには相場を占わせて、あわよくば天下を取ろうと云う、色と欲とにかけた腹らしいのです。

が、お敏の身になって見れば、いかに夢現ゆめうつの中で云う事にしろ、お島婆さんが悪事を働くのは、全く自分の云いつけ通りにするのですから、良心がなければ知らない事、こんな道具に使われるのは空恐しいのに相違ありません。そう云えば前に御話したお島婆さんの養女と云うのも、引き取られるからこの役に使われ通しで、ただでさえ脾弱ひよわいのが益々病身になってしまいました。が、とうとうしまいには心の罪に責められて、あの婆の寝ている暇に、首を縊くって死んだと云う事です。お敏が新蔵の家から暇を

とつたのは、この養女が死んだ時で、可哀そうにその新仏が幼馴染のお敏へ宛てた、一封の書置きがあつたのを幸、早くもあの婆は後釜にお敏を据えようと思つたのでしよう。まんまとそれを種に暇を貰わせて、今の住居へおびき寄せると、殺しても主人の所へは帰さないと、強^{こわおもて}面に云い渡してしまつたそうです。が、勿論新蔵と堅い約束の出来ていたお敏は、その晩にも逃げ帰る心算^{もり}だつたようですが、向うも用心していたのでしよう。度々入口の格子戸を窺^{うかが}つても、必ず外に一匹の蛇が大きなとぐろを巻いてるので、到底一足も踏み出す勇氣は、起らなかつたと云う事です。それからその後も何度となく、隙を狙つては逃げ出しにかかると、やはり似たような不思議があつて、どうしても本意が遂げ

られません。そこでこの頃は仕方がなく何も因縁事と詮めて、泣く泣くお島婆さんの云いなり次第になつていました。

ところがこの間新蔵が来て以来、二人の關係が知れて見ると、日頃非道なあのお婆が、お敏を責めるの責めないのじやありません。それも打ったりつねったりするばかりか、夜更けを待つては怪しげな法を使つて、両腕を空ざまに吊し上げたり、頸のまわりへ蛇をまきつかせたり、聞くさえ身の毛のよ立つような、恐しい目にあわせるのです。が、それよりもさらにつらいのは、そう云う折せ檻つかんの相間あいま相間に、あのお婆がにやりと嘲笑あざわら笑つて、これでも思い切らなければ、新蔵の命を縮めても、お敏は人手に渡さないと、憎々しく嚇おどす事でした。こうなるとお敏も絶体絶命ですから、今

までは何事も宿命と覚悟をきめていたのが、万一新蔵の身の上に取り返しのない事でも起つては大変と、とうとう男に一部始終を打ち明ける気になったのです。が、それも新蔵が委細を聞いた後になつて、そう云う恐しい事をする女かと、嫌いもし蔑さげすみもしそうでしたから、いよいよ泰たいさんの所へ駈たけつけるまでには、どのくらい思い迷つたか、知れないほどだつたと云う事でした。

お敏はこう話し終ると、またいつものように蒼白な顔を挙げて、じつと新蔵の眼を見つめながら、「そう云う因果な身の上なのでございますから、いくらつらくつても悲しくつても、何もなかつた昔と詮めて、このまま——」と云いかけてましたが、もう我慢が出来なくなつたと見えて、男の膝へすがつたなり、袖を

嘸んで泣き出しました。途方とほうに暮れたのは新蔵で、しばらくはただお敏の背をさすりながら、叱つたり励ましたりしていたもの、さてあのお島婆さんを向うにまわして、どうすれば無事に二人の恋を遂げる事が出来るかと云うと、残念ながら勝算は到底ないと云わなければなりません。が、勿論お敏のためにも弱味を見すべき場合ではないので、無理に元気の好い声を出しながら、「何、そんなに心配おしでない。長い間にはまた何とか分別もつこうと云うものだから。」と、一時のがれの慰めを云いますと、お敏はようやく涙をおさめて、新蔵の膝を離れましたが、それでもまだ潤み声で、「それは長い間でしたら、どうにかならない事もございますまいが、明後日の夜はまた家の御婆さんが、神を下すと云

つて居りましたもの。もしその時私がふとした事でも申しましたら——」と、術なさそうに云うのです。これには新蔵も二度吐胸とむねを衝いて、折角のつけ元気さえ、全く沮喪そそうせずにはいられませんでした。明後日と云えば、今日明日の中に、何とか工夫くふうをめぐらさなければ、自分は元よりお敏まで、とり返しのつかない不幸の底に、沈淪しなければなりません。が、たった二日の間に、どうしてあの怪しい婆を、取って抑える事が出来ましょう。たとい警察へ訴えたにしろ、幽冥ゆうめいの世界で行われる犯罪には、法律の力も及びません。そうかと云って社会の輿論よろんも、お島婆さんの悪事などは、勿論晒わらうべき迷信として、不問に附してしまふでしょう。そう思うと新蔵は、今更のように腕を組んで、茫然とするよ

りほかはありませんでした。そう云う苦しい沈黙が、しばらくの間続いた後で、お敏は涙ぐんだ眼を挙げると、ほの仄かに星の光つている暮方の空を眺めながら、「いつそ私は死んでしまいたい。」と、かすかな声で呟きましたが、やがて物に怯おびえたように、怖おぞお々あたりを見廻して、「余り遅くなりますと、また家の御婆さんに叱られますから、私はもう帰りましょう。」と、根も精もつき果てた人のように云うのです。成程そう云えばここへ来てから、三十分は確かに経ちましたろう。夕闇は潮の勻においと一しよに二人のまわりを立て罩こめて、向う河岸の薪たきぎの山も、その下に繋つないである苦とまぶね船も、蒼茫たる一色に隠れながら、ただ豎川の水ばかりが、ちようど大魚の腹のように、うす白くうねうねと光っています。

新蔵はお敏の肩を抱いて、優しく唇を合せてから、「ともかくも明日の夕方には、またここまで来ておくれ。私もそれまでには出来るだけ、知慧を絞しぼつて見る心算だから。」と、一生懸命に力をつけました。お敏は頬の涙の痕あとをそつと濡手拭で拭きながら、無言のまま悲しそうに頷うなきました。さて悄悄根府川石から立上つて、これも萎しおれ切つた新蔵と一しよに、あの御影の狛犬の下を寂しい往来へ出ようとする、急にまた涙がこみ上げて来たのでしよう。夜目にも美しい襟足を見せて、せつなそうにうつむきながら、「ああ、いつそ私は死んでしまいたい。」と、もう一度かすかにこう云いました。するとその途端です。さつき二羽の黒い蝶が消えた、例の電柱の根元の所に、大きな人間の眼が一つ、髻ぼうふ

髯ひげとして浮び出したじゃありませんか。それも睫毛まつげのない、うす青い膜がかかったような、瞳の色の濁っている、どこを見ているともつかない眼で、大きさはかれこれ三尺あまりもありましたろう。始は水の泡のようにふつと出て、それから地の上を少し離れた所へ、漂うごとくぼんやり止りましたが、たちまちそのどろりとした煤色の瞳が、斜まなじりに皆の方へ寄ったそうです。その上不思議な事には、この大きな眼が、往来を流れる闇ににじんで、朦もうろ朧うろとあったのに関らず、何とも云いようなない悪意の閃きを蔵くらしているように見えました。新蔵は思わず拳を握って、お敏の体をかばいながら、必死にこの幻を見つめたと云います。実際その時は総身の毛穴へ、ことごとく風がふきこんだかと思うほど、ぞ

つと背筋から寒くなって、息さえつままるような心もちだったのでしよう。いくら声を立てようと思つても、舌が動かなかつたと云う事でした。が、幸その眼の方でも、しばらくは懸命の憎悪を瞳に集めて、やはりこちらを見返すようでしたが、見る見る内に形が薄くなつて、最後に貝殻のようなまぶた眸が落ちると、もうそこには電柱ばかりで、何も怪しい物の姿は見えません。ただ、あのうば烏羽揚羽あげはのような物が、ひらひら飛び立つたように見えたようですが、それは事によると、地を掠かすめた蝙蝠こうもりだったかも知れずまい。その後で新蔵とお敏とは、まるで悪い夢からでも醒めたように、うつとり色を失つた顔を見合せましたが、たちまち互の眼の中に、恐しい覚悟の色を読み合うと、我知らずしつかり手を取り交して、

わなわな身ぶるいしたと云う事です。

それから三十分ばかり経った後、新蔵はまだ眼の色を変えたまま、風通しの好い裏座敷で、主人の泰さんを前にしながら、今夜出合ったさまざまな不思議な事を、小声でひそひそと話していました。二羽の黒い蝶の事、お島婆さんの秘密の事、大きな眼の幻の事——すべてが現代の青年には、荒唐無稽ことうむけいとしか思われぬ事ですが、兼ねてあの婆の怪しい呪じゆりき力を心得ている泰さんは、さらに疑念を挟む気色もなく、アイスクリームを薦すすめながら、片唾たずを呑んで聞いてくれるのです。「その大きな眼が消えてしまうと、お敏はまっ蒼な顔をして、『どうしましょう。ここであなたと御目にかかったのが、もう御婆さんに知れてしまいました。』」

と云うんだ。が、僕は『こうなったが最後、あの婆と我々との間には、戦争が始まったのも同様なんだから、知れようが知れまいが、かまうもんか。』って威張ったんだがね。困った事には今も話した通り、僕は明日またあの石河岸で、お敏と落合う約束がしてあるだろう。ところが今夜の出会いがあ婆に見つかったとなると、恐らく明日はお敏を手放して、出さないだろうと思うんだ。だからよしんばあの婆の爪の下から、お敏を救い出す名案があつてもだね、おまけにその名案が今日明日中に思いついたにしてもだ。明日の晩お敏に逢えなけりや、すべての計画が画餅がへいになる訣わけだろう。そう思ったら、僕はもう、神にも仏にも見放されたような心もちがしてね。お敏に別れてここへ来るまでの間も、まるで

足は地に着いていないような心もちだった。」——新蔵はこう委い細さいを話し終ると、思い出したように団扇うちわを使いながら、心配そうに泰さんの顔を窺うかがいました。が、泰さんは存外驚かずに、しばらくはただ軒先の釣つり葱しのぶが風にまわるのを見ていましたが、ようやく新蔵の方へ眼を移すと、それでもちよいと眉をひそめて、

「つまり君が目的を達するにや、三重の難関がある訣だね。第一に君はお島婆さんの手から、安全にだね、安全にお敏さんを奪い取らなければならぬ。第二にそれも明後日までには、是非共実行する必要がある。それからその実行上の打合せをするために、明日中にお敏さんに逢つて置きたい、——と云うのが第三の難関だろう。そこでこの第三の難関はだね。第一第二の難関さえ切り

抜けられりや、どうにでもなると思うんだ。」と、自信があるらしい口調で云うのです。新蔵はまだ浮かない顔をしたまま、「どうして?」と、疑わしそうに尋ねました。すると泰さんは面憎いほど落着いた顔をして、「何、訣わけはありやしない。君が逢えなけりや——」と云いかけましたが、急にあたりを見廻しながら、「こうつと、こりやいざと云う時まで伏せて置こう。どうもさつきからの話じゃ、あの婆め、君のまわりへ嚴重に網を張っているらしいから、うっかりした事は云わない方が好きそうだ。実は第一第二の難関も破つて破れなくはなさそうに思うんだが。——まあ、まあ、万事僕に任せて置まかき。それより今夜は麦酒ビールでも飲んで、大いに勇気を養つて行き給え。」と、しまいにはさも気楽ら

しい笑に紛まぎらしてしまふじやありませんか。新蔵は勿論それを、もどかしくも腹立たしくも思いましたが、さてその麦酒が始まつて見ると、やはり泰さんの用心がもつともだつたと思うような事が起りました。と云うのは二人の間に浮かない世間話が始まつてから、ふと泰さんが気がつくつと、燻いぶし鮭さけの小皿と一しよに、新蔵の膳に載つて居るコップがもう泡の消えた黒麦酒をなみなみと湛えたまま、口もつけずに置いてあります。そこで泰さんが水の垂れる麦酒ビール罈びんの尻をとつて、「さあ、ちつと陽気に干そうじやないか。」と、相手を促した時の事でした。何気なくそのコップをとり上げた新蔵が、ぐいと一息に飲もうとすると、直径二寸ばかりの円を描いた、つらりと光る黒麦酒の面に、天井の電燈や後の葎よ

戸が映しどっている——そこへ一瞬間、見慣れない人間の顔が映ったのです。いや、もつと精密に云えばただ見慣れない顔と云うだけで、人間かどうかもはつきりとはわかりません。こちらの考え方一つでは、鳥とでも、獣とでも、乃至ないしは蛇や蛙とでも、思つて思えない事はないのです。それも顔と云うよりは、むしろその一部分で、殊に眼から鼻のあたりが、まるで新蔵の肩越しにそつとコップの中を覗いたかのごとく、電燈の光を遮さえぎつて、ありありと影を落しました。こう云うと長い間の事のようにですが、前にも云つた通りほんの一瞬間で、何とも判然しない物の眼が、直径二寸の黒麦酒の円の中から、ちらりと新蔵の眼を窺つたと思うと、たちまち消え失せてしまったのです。新蔵は飲もうとしたコップを下

へ置いて、きよろきよろ前後を見廻しました。が、電燈も依然として明るければ、軒先の釣つりしのぶあいかわらず葱も相不変風に廻っていて、この涼しい裏座敷には、さらに妖ようしゆう臭ゆうを帯びた物も見当りません。「どうした。虫でもはいつたんじやないか。」——こう泰さんに尋ねられた新蔵は、仕方なく額の汗を拭って、「何、妙な顔がこの麦酒に映ったんだ。」と、恥しそうに答えました。これを聞くと泰さんは、「妙な顔が映った？」と反響のように繰返しながら、新蔵のコツプを覗きこみましたが、元より今はそう云う泰さんの顔のほかには、顔らしいものは何も映りません。「君の神経のせいじやないか。まさかあの婆も、僕の所までは手を出しやしなからう。」「だって君は今も自分でそう云ったじやないか。僕の体の

まわりにや、抜け目なくあの婆が網を張っているからつて。」

「大きにそうだつけ。だがまさか——まさかその麦酒のコツプへ、あの婆が舌を入れて、一口頂戴したつて次第でもなからう。それならかまわないから、干してしまい給え。」——こう云う具合に

泰さんは、いろいろ沈んだ相手の気を引き立てようとしましたが、新蔵は益々ふさぐ一方で、とうとうそのコツプも干さない内に、

もう帰り仕度をし始めました。そこで泰さんもやむを得ず、呉くれぐ々も力を落さないようにと、再三親切な言葉を添えてから、電

車では心もとないと云うので、車まで云いつけてくれたそうです。

その晩は寝ても、妙な夢ばかり見て、何度となくうなされましたが、それでもようやく朝になると、新蔵は早速泰さんの所へ、

昨夜の礼旁かたがた々電話をかけました。すると電話に出て来たのは、泰さんの店の番頭で、「旦那だんなは今朝ほど早く、どちらかへ御出かけになりました。」と云う挨拶あいさつなのです。新蔵はもしやお島婆さんの所へでも、行ったのじゃないかと思いましたが、打ち明けてそう尋ねる訣わけにも行かず、また尋ねたにした所で、余人の知っている筈はずありませんから、帰りそうそう々知らせてくれるようにと、よく番頭に頼んで置いて、一まず電話を切つてしまいました。所がかれこれ午近くになると、今度は泰さんから電話がかかって来て、案の定今朝お島婆さんの所へ、家相を見て貰いに行つたと云うのです。「幸、お敏さんに会つたからね、僕の計画だけは手紙にして、そつとあの人の手に握らせて来たよ。返事は明日でなく

つちやわからないが、何しろ非常の場合だから、お敏さんも振つて引受けそうなものだ。」——こう云う泰さんの言葉を聞いてみると、いかにも万事が好都合に運びそうな気がしますから、いよいよ新蔵はその計画と云うのが知りたくなつて、「一体何をどうする心算つもりなんだ。」と尋ねますと、泰さんはやはり昨夜のように、電話でもにやにや笑っている容ようす子で、「まあ、もう二三日待ち給え。あの婆が相手じゃ、電話だつて油断がならないからね。じゃいずれまた僕の方から、電話をかける事にしよう。さようなら。」と云う始末なのです。電話を切つた新蔵は、いつもの通りその後で、帳場ちやうば格子ばこの後へ坐りましたが、さあここ二日の間に自分とお敏との運命がきまるのだと思うと、心細いともつかず、もどか

しいともつかず、そうかと云つて猶なおよ更さらまた嬉しいともつかず、ただ妙にわくわくした心もちになつて、帳面も算盤そろばんも手につきません。そこでその日は、まだ熱がとれないようだと言ふのを口実に、午から二階の居間で寝ていました。が、その間でも絶えず気になつたのは、誰かが自分の一挙一動をじつと見つめているよ
うな心もちで、これは寝ていると起きているとに關らず、執念深
くつきまとつていたそうです。現に午過ぎの三時頃には、確かに
二階の梯子段はしごだんの上り口に、誰か蹲うずくまつているものがあつて、その
視線が葭戸よしど越しに、こちらへ向けられているようでしたから、す
ぐに飛び起きて、そこまで出て行つて見ましたが、ただ磨きこん
だ廊下ろうかの上に、ぼんやり窓の外の空が映つているだけで、何も人

間らしいものは見えませんでした。

こう云う具合でその翌日になると、益々新蔵は気が気でなくなつて、泰さんの電話がかかるのを今か今かと待っていました、ようやく昨日と同じ刻限こくげんになつて、約束通り電話口へ呼び出されました。しかし出て見ると泰さんは、昨日よりさらに元気の好い声で、「とうとう君、お敏さんの返事があつてね、一切僕の計画通り実行する事になったよ。何、どうして返事を受取つた？ また用を拵こしらえて、僕自身あの婆の所へ出馬したのさ。すると昨日手紙で頼んであるから、取次に出たお敏さんが、すぐに僕の手へ返事を忍ばせたんだ。可愛い返事だぜ。平仮名で『しようちいたしました』と書いてある——」と、得意らしく弁じ立てるのです。

ところが今日は妙な事に、こう云う言葉の途中から、泰さんの声ばかりでなく、もう一人誰かの声がいりました。もつともこの声と云うのも、何と云っているのだから、言葉は皆かいてもく目わからないのですが、とにかく勢いの好い泰さんの声とは正反対に、鼻へかかった、力のない、喘あえぐような、まだるい声が、ちようど陰と日向なたとのように泰さんの饒舌しゃべつて行く間を縫つて、受話器の底へ流れこむのです。始めの内は新蔵も、混線だらうくらいな量見で、別に気にもしませんでしたから、「それから、それから。」と促し立てて、懐しいお敏の消息を、夢中になつて聞いていました。が、その内に泰さんにも、この妙な声が聞えたのでしよう。「何だか騒々しいな。君の方かい。」と尋ねますから、「いや僕の方

じやない。混線だろう。」と答えますと、泰さんはちよいと舌打ちをした気色で、「じや一度切つて、またかけ直すぜ。」と云いながら、一度所か二度も三度も、交換手に小言を云つちや、根気よく繋ぎ直させましたが、やはり蟄がまつぶやの呟つぶやくような、ぶつぶつ云う声が聞えるのです。泰さんもしまいには我を折つて、「仕方がないな。どこかに故障があるんだろう。——が、それより肝腎かんじんの本筋だがね、いよいよお敏さんが承知したとなりや、まあ、万々計画通り成功するだろうと思うから、安心して吉報を待つてい給え。」と、またさっきの話を続け出しましたが、新蔵はやはり泰さんの計画と云うのが気になるので、もう一遍昨日のように、「一体何をどうする心算つもりなんだ。」と尋ねますと、相手は例のご

とく澄ましたもので、「もう一日辛抱し給え。明日の今時分までにや、きつと君にも知らせられるだろうと思うから。——まあ、そんなに急がないで、大船に乗った気で待っているさ。果報は寝て待って云うじゃないか。」と、冗じようだん談まじりに答えました。するとその声はまだ終らない内に、もう一つのぼやけた声が急に耳の側へ来て、「悪あがきは思い止らつしやれや。」と、はつきり嘲笑あざわらったじやありませんか。泰さんと新蔵とは思わず同時に両方から、「何だ、今の声は。」と尋ね合いましたが、それぎり受話器の中はひっそりして、あの眩くような鼻声さえ全く聞えなくなつてしまいました。「こりやいけない。今のは君、あの婆だぜ。悪くすると、折角の計画も——まあ、すべてが明日の事だ。」

じやこれで失敬するよ。」——こう云いながら、電話を切った泰さんの声の中には、明かに狼狽ろうばいしたけはいが感じられました。また実際お島婆さんが、二人の間の電話にさえ気を配るようになったとすると、勿論泰さんとお敏とが秘密の手紙をやりとりしているにも、目をつけているのに相違ありませんから、泰さんの慌てるのもつともなのです。まして新蔵の身になって見れば、どうする心算か知らないにもせよ、とにかくかけ換のない泰さんの計画が、あの婆に裏を搔かかれる以上、それこそ万事休してしまふよりほかはありません。ですから新蔵は電話口を離れると、まるで喪そうしん心した人のように、ぼんやり二階の居間へ行つて、日が暮れるまで、窓の外の青空ばかり眺めていました。その空にも気の

せいか、時々あの忌わしい烏羽揚羽うばあげはが、何十羽となく群を成して、気味の悪い更紗模様さらさもようを織り出した事があるそうですが、新蔵はもう体も心もすっかり疲れ果てていましたから、その不思議を不思議として、感じる事さえ出来なかつたと云います。

その晩もまた新蔵は悪夢ばかり見続けて、碌々ろくろく眠る事さえ出来ませんでした。それでも夜が明けると、幾分か心に張りが出ましたので、砂を噛むより味のない朝飯をすませると、早速泰さんへ電話をかけました。「莫迦ぼかに、早いじゃないか。僕のような朝寝坊の所へ、今時分電話をかけるのは残酷ざんこくだよ。」——泰さんは実際まだ眠むそうな声で、こう苦情を申し立てましたが、新蔵はそれには返事もしないで、「僕はね、昨日の電話の一件があ

つて以来、とても便々と家にやいられないからね。これからすぐに君の所へ行くよ。いいえ、電話で君の話を聞いたくらいじゃ、とても気が休まらないんだ。好いかい。すぐに行くからね。」と、だだっ子のように云い張ったそうです。この興奮し切った口調を聞いちや、泰さんもほかに仕方がなかったのでしょう。「じゃ来給え。待っているから。」と、素直に答えてくれたので、新蔵は電話を切るが早いか、心配そうな母親にもむずかしい顔を見せただけで、どこへ行くとも断らずに、ふいと店を飛び出しました。出て見ると、空はどんよりと曇って、東の方の雲の間に赤銅色の光が漂っている、妙に蒸暑い天気でしたが、元よりそんな事は気にかける余裕もなく、すぐ電車へ飛び乗って、すいているのを幸

と、まん中の座席へ腰を下したそうです。すると一時恢復したように見えた疲労が、意地悪くまだ残っていたのか、新蔵は今更のように気が沈んで、まるで堅い麦藁帽子むぎわらぼうしが追々頭をしめつけるのかと思うほど、烈しい頭痛までして来ました。そこで気を紛せまぎらたい一心から、今まで下駄の爪先ばかりへやっていた眼を、隣近所へ挙げて見ると、この電車にもまた不思議があつた。——と云うのは、天井の両側に行儀よく並んでいる吊皮つりかわが、電車の動揺するのにつれて、皆振り子のようふりこに揺れています。新蔵の前の吊皮だけは、始終じつと一つ所に、動かないでいるのです。それも始は可笑おかしいなくらいな心もちで、深くは気にも止めませんでしたが、その内にまた誰かに見つめられているような、気味の悪い

心もちが自然に強くなり出したので、こんな吊皮の下に坐っているのが、いけないのだらうと思いましたが、向う側の隅にある空席へわざわざ移りました。移って、ふと上を見ると、今まで揺られていた吊皮が突然造りつけたように動かなくなつて、その代りさっきの吊皮が、さも自由になつたのを喜ぶらしく、勢いよくぶらつき始めたじゃありませんか。新蔵は毎度の事ながら、この時もやはり頭痛さえ忘れるほど、何とも云えない恐怖きょうふを感じて、思わず救いを求めるごとく、ほかの乗客たちの顔を見廻しました。と、斜に新蔵と向い合つた、どこかの隠居らしい婆さんが一人、黒絹くろろの被布ひふの襟を抜いて、金縁の眼鏡越しにじろりと新蔵の方を見返したのです。勿論それはあの神下しの婆なぞとは何の由縁ゆかりも

ない人物だったのには相違ありませんが、その視線を浴びると同時に、新蔵はたちまちお島婆さんの青んぶくれの顔を思い出ししましたから、もう矢も楯もたまりません。いきなり切符を車掌へ渡すと、仕事を仕損じた掏摸すりより早く、電車を飛び降りてしまいました。が、何しろ凄まじい速力で、進行していた電車ですから、足が地についたと思うと、麦藁帽子が飛ぶ。下駄の鼻緒はなおが切れる。その上俯向きに前へ倒れて、膝ひざがしら頭すりむを摺剥くと云う騒ぎです。いや、もう少し起きるのが遅かったら、砂煙を立てて走って来た、どこかの貨物自動車に、轆ひかれてしまった事でしょう。泥だらけになった新蔵は、ガソリンの煙を顔に吹きつけて、横なぐれに通り返した、その自動車の黄色塗の後に、商標らしい黒い蝶の

形を眺めた時、全く命拾いをしたのが、神業のような気がしたそうです。

それが鞍掛橋くらかけばしの停留場へ一町ばかり手前でしたが、仕合せと通りかかった辻車が一台あったので、ともかくもその車へ這い上ると、まだ血相を変えたまま、東両国へ急がせました。が、その途中も動悸どうきはするし、膝頭の傷はずきずき痛むし、おまけに今の騒動があつた後ですから、いつ何時この車もひっくり返りかねないような、縁起の悪い不安もあるし、ほとんど生きている空はなかつたそうです。殊に車が両国橋へさしかかつた時、国技館の天に臙おぼろぎん銀の縁をとつた黒い雲が重なり合つて、広い大川の水面しじみに蜩蝶しじみの翼のような帆影が群つているのを眺めると、新蔵はいよ

いよ自分とお敏との生死の分れ目が近づいたような、悲壮な感激に動かされて、思わず涙さえ浮めました。ですから車が橋を渡つて、泰さんの家の門口へやつと梶棒を下した時には、嬉しいのか、悲しいのか、自分にも判然しないほど、ただ無性に胸が迫つて、げんげんな顔をしている車夫の手へ、ほうがい方外な賃金を渡す間も惜しいように、そうこう倉皇と店先ののれん暖簾をくぐりました。

泰さんは新蔵の顔を見ると、手をとらないばかりにして、例の裏座敷へ通しましたが、やがてその手足のきずあと創痕だの、ほころ綻びの切れた夏羽織だのに気がついたものと見えて、「どうしたんだい。その体裁は。」と、呆れたように尋ねました。「電車から落つこつてね、鞍掛橋の所で飛び降りをしそくなつたもんだから。」

「田舎者いなかもじやあるまいし、——気が利かないにも、ほどがあるぜ。だが何だつてまた、あんな所で、飛び降りなんぞしたんだらう。」——そこで新蔵は電車の中で出会つた不思議を、一々泰さんに話して聞かせました。すると泰さんは熱心にその一部始終を聞き終つてから、いつになく眉をひそめて、「形勢いよいよ非だね。僕はお敏さんが失敗したんじゃないかと思うんだが。」と独り言のように云うのです。新蔵はお敏の名前を聞くと、急にまた動悸が高まるような気がしましたから、「失敗したんじゃないか
つて？ 君は一体お敏に何をやらせようとしたんだ。」と、詰きつ問するごとく尋ねました。けれども泰さんはその問には答えな
いで、「もつともこうなるのも僕の罪かも知れないんだ。僕がお

敏さんへ手紙を渡した事なんぞを、電話で君にしやべらなかつたら、あの婆も僕の計画には感づかず^にいたのに違いないんだからな。」と、いかにも当惑したらしいため息さえ洩らすのです。新蔵はいよいよたまらなくなつて、「今になつてもまだ君の計画を知らせてくれないと云うのは、あんまり君、残酷ざんこくじゃないか。そのおかげで僕は、二重の苦しみをしなけりやならないんだ。」と、声を震わせながら怨じ立てると、泰さんは「まあ。」と抑えるような手つきをして、「そりや重々もつともだよ。もつともだと云う事は僕もよく承知しているんだが、あの婆を相手にしている以上、これも已やむを得ない事だと思つてくれ給え。現に今も云つた通り、僕はお敏さんへ手紙を渡した事も、君に打明けずに黙

つていたら、もつと万事好都合に、運んだかも知れないと思つて
いるんだ。何しろ君の一言一動は、皆、お島婆さんにや見透しら
しいからね。いや、事によると、この間の電話の一件以来、僕も
随分あの婆に睨にらまれていないもんでもない。が、今までの所じゃ、
とにかく僕には君ほどの不思議な事件も起らないんだから、實際
僕の計画が失敗したのかどうか、それがはつきり分るまでは、い
くら君に恨うらまれても、一切僕の胸一つにおさめて置きたいと思っ
んだ。」と、諭さとしたり慰めたりしてくれました。が、新蔵はそう
聞いた所で、泰さんの云う事には得心出来ても、お敏の安否を気
使う心に変りのある筈はありませんから、まだ険しい表情を眉の
間に残したまま、「それにしても君、お敏の体に間違いのあるよ

うな事はないだろうね。」と、突っかかるように念を押すと、泰さんもやはり心配そうな眼つきをして、「さあ。」と云ったぎり、しばらくは思案しあんに沈んでいましたが、やがてちよいと次の間の柱時計を覗のぞきながら、「僕もそれが気になって仕方がないんだ。じやあの婆の家へは行かないでも、近所まで偵察ていさつに行つて見ようか。」と、思い切つたらしく云うのです。新蔵も実は悠長にこうして坐りこんでいるのが、気が気でなかつた所ですから、勿論いやと言う筈はありません。そこですぐに相談まとまが纏つて、ものの五分と経たない内に、二人は夏羽織の肩を並べながら、そうそう々々泰さんの家を出ました。

所が泰さんの家を出て、まだ半町と行かない内に、ばたばた後

から駈けて来るものがありますから、二人とも、同時に振返つて見ると、別に怪しいものではなく、泰さんの店の小僧が一人、蛇じやの目を一本肩にかついで、大急ぎで主人の後を追いかけて来たのです。「傘か。」「へえ、番頭さんが降りそうですから御持ちなさいまして云いました。」「そんならお客様の分も持つてくりや好いのに。」——泰さんは苦笑しながら、その蛇の目を受取ると、小僧は生意気に頭を搔いてから、とつてつけたように御辞儀をして、勢いよく店の方へ駈けて行つてしまいました。そう云えば成程頭の上にはさつきよりも黒い夕立雲が、一面にむらむらと滲み渡つて、その所々を洩れる空の光も、まるで磨いた鋼鉄のよ
うな、気味の悪い冷たさを帯びているのです。新蔵は泰さんと一

しよに歩きながら、この空模様を眺めると、また忌わしい予感に襲われ出したので、自然相手との話もはずまず、無暗むやみに足ばかり早め出しました。ですから泰さんは遅れ勝ちで、始終小走りに追いついては、さも気忙きせわしそうに汗を拭いていましたが、その内にととうあきらめたのでしよう。新蔵を先へ立たせたまま、自分は後から蛇の目の傘を下げて、時々友だちの後姿を気の毒そうに眺めながら、ぶらぶら歩いて行きました。すると二人が一の橋たもとの袂を左へ切れて、お敏と新蔵とが日暮ひぐれに大きな眼の幻を見た、あの石河岸の前まで来た時、後から一台の車が来て、泰さんの傍を走り抜けましたが、その車の上の客の姿を見ると、泰さんは急に眉をひそめて、「おい、おい。」と、けたたましく新蔵を呼び止

めるじやありませんか。そこで新蔵もやむを得ず足を止めて、不ふしょうぶしょう

承不承に相手を見返りながら、うるさそうに「何だい。」と

答えると、泰さんは急ぎ足に追いついて、「君は今、車へ乗って通つた人の顔を見たかい。」と、妙な事を尋ねるのです。「見たよ。痩せた、黒い色眼鏡をかけている男だろう。」——新蔵はいぶかしそうにこう云いながら、またさつさと歩き出しましたが、泰さんはさらにひるまないで、前よりも一層重々しく、「ありやね、君、僕の家の上じょうとくい華客で、鍵かぎ惣そうつて云う相場師そうばしだよ。僕は事によるとお敏さんを妾めかけにしたいと云っているのは、あの男じやないかと思うんだがどうだろう。いや、格別何故わけつて訣わけもないんだが、ふとそんな気がし出したんだ。」と、思いもよらない事を

云い出しました。が、新蔵はやはり沈んだ調子で、「気だけだろ
う。」と云い捨てたまま、例の桃葉湯の看板さえ眺めもせず歩
いて行くのです。と、泰さんは蛇の目の傘で二人の行く方を指さ
しながら、「必ずしも気だけじゃないよ。見給え。あの車はお島
婆さんの家の前へ、ちゃんと止っているじゃないか。」と得意ら
しく新蔵の顔を見返しました。見ると実際さつきの車は、雨を待
っている葉柳はやなぎが暗く条を垂らした下に、金紋のついた後をこち
らへ向けて、車夫は蹴込みけこの前に腰をかけているらしく、悠々と
楫棒かじぼうを下ろしているのです。これを見た新蔵は、始めて浮かぬ
顔色の底に、かすかな情熱を動かしながら、それでもまだものう懶げな
最初の調子を失わないで、「だがね、君、あの婆に占を見て貰い

に来る相場師だつて、鍵惣とかのほかにもいるだろうじやないか。
。」と面倒臭そうに答えましたが、その内にもうお島婆さんの家
と隣り合つた、左官屋の所まで来かかつたからでしょう。泰さん
はその上自説も主張しないで、油断なくあたりに気をくばりなが
ら、まるで新蔵の身をかばうように、夏羽織の肩を摺り合せて、
ゆっくり、お島婆さんの家の前を通りすぎました。通りすぎなが
ら、二人が尻眼ようすに容子を窺うと、ただふだんと変つてゐるのは、
例の鍵惣が乗つて来た車だけで、これは遠くで眺めたのよりもず
つと手前、ちようど左官屋の水口の前に太ゴムの轍わだちを威かつく止
めて、バットの吸殻を耳にはさんだ車夫が、もつともそうに新聞
を読んでゐます。が、そのほかは竹格子の窓も、すす煤けた入口の格

子戸も、乃至ないしはまだ葭戸あしどにも変らない、格子戸の中の古ぼけた障子の色も、すべてがいつもと変らないばかりか、家内もやはり日頃のように、陰森いんしんとした静かさが罩こもっているように思われました。まして万一を僥ぎよう倖こうして来た、お敏の姿らしいものは、あのしおらしい紺緋の袂が、ひらめくのさえ眼にはいりません。ですから二人はお島婆さんの家の前を隣の荒物屋の方へ通りぬけると、今までの心の緊張が弛ゆるんだと云う以外にも、折角の当てが外はずれたと云う落胆まで背負わずにはいられませんでした。

ところがその荒物屋の前へ来ると、浅草紙、亀かめの子束子こだわし、髪洗粉などを並べた上に、蚊やり線香と書いた赤提燈が、一ぱいに大きく下っている——その店先へ佇たたずんで、荒物屋のお上さんと話し

ているのは、紛れもないお敏だろうじやありませんか。二人は思まぎわず顔を見合せると、ほとんど一秒もためらわずに、夏羽織の裾ひるがえを翻しながら、つかつかと荒物屋の店へはいました。そのけはいに気がついて、二人の方を振り向いたお敏は、見る見る蒼白い頬の底にほのかな血の色を動かしましたが、さすがに荒物屋のお上さんの手前も兼ねなければならなかつたのでしよう。軒先へ垂れている柳の条を肩へかけたまま、無理に胸の躍るのを抑えるらしく、「まあ。」とかすかな驚きの声を洩らしたとか云う事です。すると泰さんは落着き払って、ちよいと麦藁帽子ひさしの庇へ手をやりながら、「阿母おかあさんは御宅ですか。」と、さりげなく言葉をかけました。「はあ、居ります。」「で、あなたは？」「御客様の御

用で半紙を買いに——」——こう云うお敏の言葉が終らない内に、柳に塞がれた店先が一層うす暗くなつたと思うとたちまち蚊やり線香の赤提燈の胴をかすめて、きらりと一すじ雨の糸が冷たく斜に光りました。と同時に柳の葉も震えるかと思うほど、どろどろと雷が鳴つたそうです。泰さんはこれを切っかけに、一足店の外へ引返しながら、「じゃちよいと阿母おかあさんにそう云つて下さい。

私がまた見てお貰い申したい事があつて上りましたって——今も御門先で度々御免と声をかけたんだが、一向音沙汰がないんでね、どうしたのかと思つたら、肝腎かんじんの御取次がここで油を売つていたんです。」と、お敏と荒物屋のお上さんとを等分に見比べて、手際よく快活に笑つて見せました。勿論何も知らない荒物屋のお

上さんは、こう云う泰さんのたくみの巧な芝居に、気がつく筈もありませ
んから、「じやお敏さん、早く行ってお上げなさいよ。」と、気き
忙ぜわしそうに促すと、自分も降り出した雨に慌あわてて、蚊やり線香
の赤提燈をそうそう々とりこめに立ったと云います。そこでお敏も、
「じや叔母さん、また後程。」と挨拶あいさつを残して、泰さんと新蔵
とを左右にしなから、荒物屋の店を出しましたが、元より三人とも
お島婆さんの家の前には足も止めず、もう点々と落ちて来る大粒
な雨を蛇の目に受けて、一つ目の方へ足を早めました。実際その
何分かの間は、当人同志は云うまでもなく、平常は元気の好い泰
さんさえ、いよいよ運命の賽さいを投なげて、丁ちやうか半はんかをきめる時が来
たような気がしたのでしよう。あの石河岸の前へ来るまでは、三

人とも云い合せたように眼を伏せて、見る間に土砂降りになって来た雨も気がつかないらしく、無言で歩き続けました。

その内に御影みかげの狢こまいぬ犬が向い合っている所まで来ると、やっと

泰さんが顔を挙げて、「ここが一番安全だつて云うから、雨やみかたがた旁々この中で休んで行こう。」と、二人の方を振り返りました。

そこで皆一つ傘の下に雨をよけながら、積み上げた石と石との間をぬけて、ふだんは石切りが仕事をする所なのでしよう。石河岸の隅に張つてある蓆屋根むしろやねの下へはいりました。その時は雨も益々凄じくなつて、豎川を隔てた向う河岸も見えないほど、まっ白にたぎり落ちていましたから、この一枚の蓆屋根くらいでは、到底洩らずにすむ訣わけもありません。のみならず、霧のような雨のし

ぶきも、湿った土の勻においと一しよに、濛もうもう々と外から吹きこんで来ます。そこで三人は蓆屋根の下にはいりながらも、まだ一本の蛇の目を頼みにして、削りけずかけたままになっている門柱らしい御影の上に、目白押しに腰を下しました。と、すぐに口を切ったのは新蔵です。「お敏、僕はもうお前に逢えないかと思っていた。」

——こう云う内にまた雨の中を斜に蒼白い電光が走って、雲を裂くように雷が鳴りましたから、お敏は思わず銀杏いちようがえ返しを膝の上へ伏せて、しばらくはじつと身動きもしませんでした。やがて全く色を失った顔を挙げると、夢ゆめうつ現げんのような目なざしをうつとりと外の雨脚へやって、「私ももう覚悟はして居りました。」と気味の悪いほど静に云いました。心中——そう云う穏ならない

文字が、まるで燐りんでも書いたように、新蔵の頭脳へ焼きついたのは、実にこのお敏の言葉を聞いた、瞬間だったと云う事です。が、二人の間に腰を据えて、大きく蛇の目をかざしていた泰さんは、左右へ当惑そうな眼を配りながら、それでも声だけは元氣よく、「おい、しっかりしなくっちゃいけないぜ。お敏さんも勇氣を出すんです。得てこう云う時には死神が、とつ着きたがるものですからね。——そりやそうと今来ているお客は、鍵かぎ惣そうって云う相場師そうばしでしょう。ええ、私もちよいと知っているんです。あなたを妾めかけにしたいって云うのは、あの男じゃないんですか。」と、早速實際的な方面へ話を移してしまいました。するとお敏も急に夢から覚めたように、涼しい眼を泰さんの顔に注ぎながら、「え

え、あの人なんでございます。」と、口惜しそうに答えたそうです。「それ見給え。やつぱり僕の見込んだ通りじゃないか。」——こう云つて泰さんは、得意らしく新蔵の方を見返りましたが、すぐにまた真面目な調子になつて、いたわ勉るようにお敏の方へ向いながら、「この降りじや、いくら鍵惣でもまだ二十分や三十分は御宅にいるでしょう。その間に一つ、私の計画がどうなつたか話して聞かせて下さい。もし万事休したとなりや、男は当つてくだ砕けるだ。私がこれから御宅へ行つて、直接鍵惣に懸合つて見ますから。」と、新蔵の耳にもたのも頼母しいほど、男らしく云い切りました。その間も雷はいよいよ烈しくなつて、昼ながらも大幅な稲妻が、ほとんど絶え間なく滝のような雨をはたいていました。お敏は

もうその悲しさをさえ忘れるくらい、必死を極めていたのでしょう。顔も美しいと云うよりは、むしろ凄いやうなけはいを帯びて、こればかりは変らない、鮮な唇を震わせながら、「それがみんな裏を搔かれて、——もう何も彼も駄目でございますわ。」と、細く透る声で答えました。それからお敏が、この雷雨の葦屋根の下で、残念そうに息をはずませながら、途切れ途切れに物語った話を聞くと、新蔵の知らない泰さんの計画と云うのは、たった昨夜一晩の内に、こんな鋭い曲折を作つて、まんまと失敗してしまつたのです。

泰さんは始^{はじめ}新蔵から、お島婆さんがお敏へ神を下して、伺いを立てると云う事を聞いた時に、咄^{とっさ}嗟に胸に浮んだのは、その時お

敏が神かみがか憑りの真似まねをして、あの婆に一杯食わせるのが一番近道だと云う事でした。そこで前にも云った通り、家相を見て貰うのにかこつけて、お島婆さんの所へ行った時に、そつとその旨を書いた手紙をお敏に手渡して来たのです。お敏もこの計画を実行するのは、随分あぶない橋を渡るようなものだとは思いましたが、何しろ差当ってそのほかに、目前の災難を切り抜ける妙案も思い当りませんから、明くる日の朝思い切つて、「しようちいたしました」と云う返事を泰さんに渡しました。ところがその晩の十二時に、例のごとくあの婆が豎川の水に浸った後で、いよいよ婆ばさ娑羅らの神を祈り下し始めると、全く人間業では仕方のない障害のあるのを知ったのです。が、その仔細しさいを申し上げるのには、今の世

にあらうとも思われぬ、あの婆の不思議な修法の次第を御話して置かなければなりません。お島婆さんはいざ神を下すとすると、あろう事かお敏を湯巻ゆまき一つにして、両手を後へ括くくり上げた上、髪さえ根から引きほどこいて、電燈を消したあの部屋のまん中に、北へ向つて坐らせるのだそうです。それから自分も裸のまま、左の手には裸はだ蠟燭ろうそくをともし、右の手には鏡を執とつて、お敏の前へ立ちはだかりながら、口の内に秘密の呪じゆもん文を念じて、鏡を相手につきつけつけつけ、一心不乱に祈念をこめる——これだけでも普通の女なら、氣を失うのに違いありませんが、その内に追々呪文の聲が高くなつて来ると、あの婆は鏡を楯たてにしながら、少しずつじりじり詰めよせて、しまいには、その鏡に氣圧けおされるのか、

両手の利かないお敏の体が仰向けあおむに畳へ倒れるまで、手をゆるめずずに責めるのだと云う事です。しかもこうして倒してしまつた上で、あの婆はまるで屍骸しがいの肉を食う爬虫類はちゆうるいのように這い寄りながら、お敏の胸の上へのしかかつて、裸蠟燭の光が落ちる気味の悪い鏡の中を、下からまともにつまでも覗かせるのだと云うじやありませんか。するとほどなくあの婆娑羅の神が、まるで古沼の底から立つ瘴氣しょうきのように、音もなく暗の中へ忍んで来て、そつと女の体へ乗移るのでしよう。お敏は次第に眼が据すわつて、手足をびくびく引き攣つらせると、もうあの婆が口忙しく畳みかける問に應じて、息もつかずに、秘密の答を饒舌しゃべり続けると云う事です。ですからその晩もお島婆さんは、こう云う手順を違えずに、神を

祈下そうとしましたが、お敏は泰さんとの約束を守って、うわべは正気を失ったと見せながら、内心はさらに油断なく、機会さえあれば真しやかに、二人の恋の妨げをするなど、贗にせの神託しんたくを下す心算つもりでいました。勿論その時あの婆が根掘り葉掘り尋ねる間などは、神慮に叶わない風を装って、一つも答えない事にきめていたのです。ところが例の裸蠟燭の光を受けて、小さいながら爛らんら々と輝いた鏡の面を見つめっていると、いくら氣を確かに持とうと思っても、自然と心が恍惚こうこつとして、いつとなく我を忘れそうな危険おびやかに脅おびされ始めました。そうかと云って、あの婆は、呪文を唱える暇もぬかりなく、じつとこちらの顔色を窺ねらいすましているのですから、隙すきを狙ねらって鏡から眼を離すと云う訣わけにも行きま

せん。その内に鏡はお敏の視線を吸いよせるように、益々怪しげな光を放つて、一寸ずつ、一分ずつ、宿命よりも気味悪く、だんだんこちらへ近づいて来ました。おまけにあの青んぶくれの婆が、絶え間なく呟く呪文の声も、まるで目に見えない蜘蛛くもの巣すのように、四方からお敏の心を擲からんで、いつか夢とも現うつともわからない境へ引きずりこもうとするのです。それがどのくらいかかったか、お敏自身も後になって考えたのでは、臃おぼろげな記憶さえ残っていない。が、ともかくも自分には一晩中とも思われるほど、長い長い間続いた後で、とうとうお敏は苦心の甲斐もなく、あの婆の秘法あなの穿あなに陥あなれられてしまったのでしよう。うす暗い裸蠟燭の火がまたたく中に、小ささまざまの黒い蝶が、数限りもなく円を描い

て、さつと天井へ舞上つたと思うと、そのまま目の前の鏡が見えなくなつて、いつもの通り死人も同様な眠に沈んでしまいました。

お敏は雷鳴と雨声との中に、眼にも唇にも懸命の色を漲みなぎらせて、

こう一部始終を語り終りました。さつきから熱心に耳を傾けていた泰さんと新蔵とは、この時云い合せたように吐息といきをして、ちら

りと視線を交せましたが、兼て計画の失敗は覚悟していても、一々その仔細しさいを聞いて見ると、今度こそすべてが画餅がへいに帰したと云

う、今更らしい絶望の威力を痛切に感じたからでしょう。しばらくは二人とも唾おしのように口を噤つぶんだまま、天を覆して降る豪雨の

音を茫然とただ聞いていました。が、その内に泰さんは勇気を振り起したと見えて、今まで興奮し切っていた反動か、見る見る陰

鬱になり出したお敏に向つて、「その間の事は何一つまるで覚えていないのですか。」と、励ますように尋ねたそうです。と、お敏は眼を伏せて、「ええ、何も——」と答えましたが、すぐにまた哀訴するような眼なごしを恐る恐る泰さんの顔へ挙げて、「やつと正気になりました時には、もう夜が明けて居りましたんです。」と、怨めしうらそうにつけ加えると、急に袂たもとを顔へ当てて、忍び泣きに咽むせび入りました。そう云う内にも外の天気は、まだ晴れ間も見えないばかりか、雷は今にも落ちかかるかと思うほど、殷いんい々と頭上に轟き渡つて、その度に瞳を焼くような電光が、しつかりなく葎屋根むしろやねの下へも閃ひらめいて来ます。すると今まで身動きもしなかつた新蔵が、何と思つたか突然立ち上ると、凄じく血相けつそう

を変えたまま、荒れ狂う雨と稲妻との中へ、出て行きそうにする
じやありませんか。しかもその手には、いつの間にか、石切りが
忘れて行ったらしい鑿のみを提さげているのです。これを見た泰さんは、
蛇の目をそこへ抛り出すが早いか、やにわに後から追いつがって、
抱くように新蔵の肩を抑えました。「おい、気でも違つたのか。」
——思わずこう泰さんは怒鳴りつけながら、無理に相手を引き戻
そうとすると、新蔵は別人のように上ずつた声で、「離してくれ
給え。もうこうなりや、僕が死ぬか、あの婆を殺すかよりほかは
ないんだ。」と、夢中で喚わめき立てるのです。「莫迦ぼかな事をするな。
第一今日は鍵かぎ惣そつも来合せていると云うじやないか。だから僕が
向うへ行つて——」「鍵惣が何だ。お敏を妾にしようと云うやつ

が、君の頼みなんぞ聞くものか。それよりか僕を離してくれ給えよ、友達甲斐に離してくれ給えつたら。」「君はお敏さんの事を忘れたのか。君がそんな無謀な事したら、あの人はどうするんだ。」——二人がこう揉み合っている間に、新蔵は優しい二つの腕が、わなわな震えながらも力強く、首のまわりに懸ったのを感じました。それから涙に溢れた涼しい眼が、限りなく悲しい光を湛^たえて、じつと彼の顔に注がれているのを眺めました。最後に大雨の音を縫って、ほとんど聞きとれないほどかすかな声が、「御一しよに死なせて下さいまし。」と、囁いたのを耳にしました。と同時に近くへ落雷があつたのでしよう。天が裂けたような一声の霹靂^{へきれき}と共に紫の火花が眼の前へ散乱すると、新蔵は恋人と友

人とに抱かれたまま、昏々として気を失ってしまいました。

それから何日か経った後の事です。新蔵はやつと長い悪夢に似た昏睡こんすい状態じょうたいから覚めて見ると、自分は日本橋の家の二階で、

ひょうのう

氷囊ひょうのうを頭に当てながら、静に横になっていました。枕元には

くすりびん

薬罏くすりびんや検温器と一しよに、小さな朝顔の鉢があつて、しおら

しい瑠璃色るりの花が咲いていますから、大方おおかたまだ朝の内なのでし

よう。雨、雷鳴、お島婆さん、お敏、——そんな記憶をぼんやり

辿りながら、新蔵はふと眼を傍へ転ずると、思いがけなくその

よしどぎわ

葭戸際よしどぎわには、銀杏返いちようがえしの鬢びんがほつれた、まだ頬の色の蒼白い

お敏が、気づかわしそうに坐っていました。いや、坐っているば

かりか、新蔵が正気に返ったのを見ると、たちまちかすかに顔を

赤らめて、「若旦那様、御気がつきなさいましたか。」と、つつましく声をかけたじやありませんか。「お敏。」——新蔵はまだ夢を見ているような心もちで、こう恋人の名を呟つぶやきましたが、その時また枕もとで、「まあ、これでやつと安心した。——おっと、そのまま、そのまま、なるべく静にしていなくっちゃいけないぜ。」と、これもやはり思いがけない泰さんの声が聞えました。

「君もいたのか。」「僕もいるしさ。君の阿母おかあさんもここに御出でなさる。御医者様は今し方帰ったばかりだ。」——こんな問答を交換しながら、新蔵は眼をお敏から返して、まるで遠い所の物でも見るように、うつとりと反対の側を眺めると、成程泰さんと母親とが、ほっとしたような顔を見合せて、枕もとに近く坐って

います。が、やっと正気に返った新蔵には、あの恐しい大雷雨の後、どうして日本橋の家へ帰つて来たのか、さらにそう云う消息がのみこめませんから、しばらくはただ茫然と三人の顔ばかり眺めていました。が、その内に母親は優しく新蔵の顔を覗のぞきこんで、「もう何事も無事に治まったからね、この上はお前もよく養生をして、一日も早く丈夫な体になつてくれなけりやいけませんよ。」と、いたたぬわるといふように言葉をかけました。すると泰さんもその後から、「安心し給え。君たち二人の思が神に通じたんだよ。お島婆さんはかぎそと話を話している内に、神鳴りに打たれて死んでしまった。」と、いつもよりも快活に云い添えるのです。新蔵はこの意外な吉報を聞くと同時に、喜びとも悲しみとも名状し難い、不思議な感

動に蕩揺とうようされて、思わず涙を頬に落すと、そのまま眼をとざしてしまいました。それが看護をしていた三人には、また失神したとでも思われたのでしよう。急に皆そわそわ立ち騒ぐようなけはいがし出しましたから、新蔵はまた眼を開くと、腰を浮かせかけていた泰さんが、わざと大袈裟おおげさに舌打ちをして、「何だ。驚かせるぜ。——御安心なさい。今泣いた鳥がもう笑っています。」と、二人の女の方をふり返りました。実際新蔵はもうこの世の中にあるの怪しい婆の影がささなくなつたのだと考えると、自然と微笑が唇に浮んで来るのを感じたのです。それからまたしばらくの間、この幸福な微笑を楽んだ後で、新蔵は泰さんの顔へ眼をやりながら、「鍵惣は？」と尋ねました。と、泰さんは笑いながら、「鍵

惣か。鍵惣は目をまわしたただけだった。」と云つて、何故かちよいとためらつたようでしたが、やがて思い直したらしく、「僕は昨日見舞に行つて、あの男自身の口から聞いたんだがね。お敏さんは神を下された時に、君たち二人の恋の邪魔じやまをすれば、あの婆の命に關ると、繰返し繰返し云つたそうだ。が、あの婆は狂言だと思つたので、明くる日鍵惣が行つた時に、この上はもう殺せつしよ生うな事をして、君たち二人の仲を裂くとか、大いに息まいていたらしいよ。して見ると、僕の計画は、失敗に終つたのに違いないんだが、そのまた計画通りの事が、實際は起つていたんだらうじゃないか。しかしお島婆さんがそれを狂言だと思つた揚句、とうとう自滅したなんぞは、どう考えても予想外だね。これじゃ

婆娑羅ばさらの神と云うのも、善だか悪だかわからなくなった。」と、怪訝けげんそうに話して聞かせるのです。こう云う話を聞くにつけても、新蔵はいよいよこの間から、自分を掌中に弄んだ、幽冥ゆうめいの力の怪しさに驚かないではいられませんでしたが、たちまちまた自分のはあの雷雨の日以来、どうしていたのだろうと思ひ出しましたから、「じゃ僕は。」と尋ねますと、今度はお敏が泰さんに代つて、「あの石河岸からすぐ車で、近所の御医者様へ御つれ申しました。が、雨に御打たれなすつたせいか、大層御熱が高くなつて、日の暮にこちらへ御帰りになつても、まるで正気ではいらつしやいませんでした。」と、しみじみした調子で口を添えました。これを聞くと泰さんも、満足そうに膝をのり出して、「その熱がやつと

引いたのは、全く君のお母さんとお敏さんとおかげだよ。今日
でまる三日の間、うわごと 譫言ばかり云っている君の看病で、お敏さん
は元より阿母さんおかあも、まんじりとさえなさないんだ。もつとも
お島婆さんの方は、追善心に葬式万端、僕がとりしきってやって
来たがね。それもこれも阿母さんの御世話になつていない物はな
いんだよ。」と、末は励ますように述べ立てるのです。「阿母さ
ん。ありがと 難有う。」「何だね、お前、私より泰さんに御礼を申し上
げなくつちや。」——こう云う内に親子とも、いや、お敏も、泰
さんも、皆涙を浮べていました。が、泰さんは男だけに、すぐ元
気な声を出して、「もうかれこれ三時でしょう。じゃ私は御暇おいとま
しますかな。」と、半ば体を起しかけると、新蔵は不審ふしんそうに眉

をよせて、「三時？　今はまだ朝じやないのかい。」と、妙な事を尋ねるのです。呆氣あつけにとられた泰さんは、「冗談じょうだん云つちやいけない。」と云いながら、帯の間の時計を抜いて、蓋を開けて見せそうにしましたが、ふと新蔵の眼が枕もとの朝顔の花に落ちているのを見ると、急に晴れ晴れした微笑を浮べて、こんな事を話して聞かせました。「この朝顔はね、あの婆の家にいた時から、お敏さんが丹精たんせいした鉢植なんだ。ところがあの雨の日に咲いたるりいろ瑠璃色の花だけは、奇体に今日まで凋しぼまないんだよ。お敏さんは何でもこの花が咲いている限り、きつと君は本復するに違いない。つて、自分も信じりや僕たちにも度々云つていたものなんだ。その甲斐かいがあつて、君が正気に返つたんだから、同じ不思議な現象

にしても、これだけはいかにも優しいじゃないか。」

(大正八年九月二十二日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1998年12月8日公開

2004年3月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妖婆

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>